様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０２４９

研究課題名（和文）文学雑誌『若草』における読者階層の形成と混交をめぐる総合的研究

研究課題名（英文）A comprehensive study on formation and mixing of the reader hierarchy in literary magazine "Wakakusa"

研究代表者
小平　麻衣子（ODAIRA, Maiko）

慶應義塾大学・文学部（三田）・教授

研究者番号：４０２９２６３５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：投稿を主眼とする文芸雑誌『若草』について、文学傾向と、投稿者の動向について調査・考察した。プロレタリア文学から新感覚派まで、さまざまな傾向の作家を集めたことにより、多くの読者を集め、作家の収入を一面で支えた。投稿者の傾向は、作家になることを目指すのではなく、趣味を同じくする仲間を探し、同人誌を起こすなど、横のつながりを作っていた。雑誌としては二流とされたが、文学という場を側面から支えていた。

研究成果の概要（英文）：About literary magazine "Wakakusa" focusing on posts, we investigated and discussed literary trends and trends of contributors.By gathering writers of various trends from proletarian literature to Shinkankaku-ha, 'Wakakusa' could have many readers and supported the writer's income in one place. The tendency of contributors is not aiming to be a writer, but looking for friends who have similar taste to issue "Doujinshi". "Wakakusa" was regarded as a second-rate literary magazine, but we revealed that it supported literature from the side.

研究分野：日本近代文学

キーワード：『若草』

１．研究開始当初の背景
文学雑誌『若草』は、発行期間の長さ、モダニズム文学からプロレタリア文学に至る多様な作家の執筆、目覚ましい読者の参加という諸点で大変特色のある雑誌である。にもかかわらず、特定の作家についての研究に引き合いに出される程度で、研究上はまったく等閑に付されていた。初期の特徴だけを挙げて、全体を女性雑誌と位置づけているものも多かった。雑誌という単位での研究が期待され、文学研究ならびに、メディア研究としても、重要であると考えられた。

２．研究の目的
多面的な視野を持つ研究分担者、海外共同研究者との共同研究によって、本雑誌の基礎的研究に先鞭をつけ、さらに、作家や党派に限定されない領域横断的な分析を行うことによって、文学研究の方法論の深化を目的とした。具体的には、文壇と読者・投稿者の交渉の具体相や、男性と女性双方に渡るジェンダー規範の生成と流動化の諸相を明かにし、〈日本〉表象の特異性についてモダニズムの観点から分析し、文学と映像メディア・身体メディアとの接点を探る。

３．研究の方法
(1)まず、閲覧困難な対象について、適宜複製等を準備し、研究分担者の便宜を図った。また、総目次の電子データ化も行った。
(2)各自が分担するテーマを決め、調査・考察ののち、研究会を開催して報告を行った。研究分担者・連携研究者・研究協力者の分担は、小平麻衣子（ジェンダー分析）、吉田司雄（映画批評、科学、モダニズム）、太田知美（恋愛、職業の分析、海外事情）、徳永夏子（ジェンダー分析）、水谷真紀（モダンガール、日本表象の分析）とした。外部講師も招聘する。1 年目は雑誌の概要と読者の役割の分析を目標とし、2 年目には、ジェンダーや視覚的メディアと文学との関係の解明までを目標とした。完成年度には、国際会議をフランスで開催し、研究の公表に努める。

４．研究成果
定例研究会は 9 回行い、述べ 22 人の研究者・大学院生などが研究発表を行った。
2016 年 5 月 3 日には、フランス・トゥールーズのトゥールーズ・ジャン・ジョレス大学において、フランス側研究者を交えて、国際会議「雑誌『若草』―1920 年代から 1940 年代までの文学と文化」を行い、研究成果の国際的な発信と情報交換に努めた。
国際会議の主な内容は、太田知美・小平麻衣子「雑誌『若草』と 1920 年代から 1940 年代までの日本の雑誌界の紹介」、徳永夏子「初期『若草』と女性の書き手―『女学世界』を媒介として―」、吉田司雄「教養としての映画―『若草』にみる外国映画受容」、島村輝「太平洋戦争開戦という「時局」―「十二月八日」「律子と貞子」を中心に」、井原あや「復刊後の「若草」―新人小説コンクール・早船ちよを中心に」、フランス側研究者のゲストとして、サンドラ・シャール「『若草』におけるモダンガール」、ブリジット・ルフェーブル「1930 年代の野上弥生子」、ジェラルド・プルー「『若草』におけるエキゾティズム―〈南〉の魅惑」が加わり、ディスカッサントにクリスティヌ・レヴィを迎えた。
定例研究会の内容は省略するが、これら一連の成果を、現在単行書として刊行準備中である。テーマは多岐にわたるが、それらの中で明らかになった点を、総合して以下に 5 点述べる。

(1)前身である『令女界』との関係
典型的な少女雑誌『令女界』の投稿欄の拡大として企図された『若草』は、女性作家の育成と発表の場を目指す方向と、増加する男性投稿者の受け皿としての役割があった。少女誌に投稿したい男性たちは、センチメンタリズムや現実とかけ離れた空想など、当時の〈女性らしさ〉を自演することを望んでいたが、少女誌からの進歩を期待する女性たちは、そうしたイメージからの卒業をイメージしており、両者にはギャップがあった。
このうち後者は、プロレタリア文学傾向を自認する読者が増えていくことと関係している。これまで文化の領域に参加できなかったという共通性において、女性たちのプロレタリア文学運動への階級的共感を呼んだからである。
また、男性と女性が抱く両極のイメージが同居できる表象として、モダン・ガールが大きくとりあげられることにもなった。モダン・ガールについては、初期『若草』がそのイメージ形成に大きく寄与している。

(2) 多様な作家とコント形式の中心化
『若草』は、文学愛好者の手引きとなり、また多くの読者を集めるために、特定の文学思潮にこだわらない方針を見せている。中野重治や徳永直や秋田雨雀や平林たい子がいる一方で、川端康成、龍膽寺雄や吉行エイスケがおり、萩原恭次郎、伊福部隆輝、尾形亀之助、春山行夫、小野十三郎などの詩人たちがあり、あらゆる文学思潮が同居する雑誌となった。
コントというジャンルが、一般的に言われる流行時期を超えて、『若草』の〈顔〉となっているのも、これと関係する。コントとは、大正末期に隆盛してきた、短編よりさらに短い形式で、「人生の断面をエスプリ(うがち)をきかして軽妙に」描くものである(保科昌夫「コント」『日本近代文学大辞典』1978 年、講談社)。だが、『若草』の特集を調査すると、必ずしも短い虚構形式というのが守られるわけではない。コント定義のうち、作者の批評を重視する、という点だけを緩やかな特徴とし、小説も、それについての評論も、時事

問題に関する批評、随筆も並べ、ジャンルについては寛容であるのが、『若草』における短編の特徴だといえよう。

(3)編集・作家と読者との階層化
同人誌としての出発や、投稿の多さは、作家と読者・投稿者の距離を近づけるように見えながら、実際には改めて線引きを行っていた。具体的には、多様なジャンルを擁し、スピーディーに移り変わる知識についての啓蒙的記事の多さが、教える側と教わる側の智識量の違いを明示し、また、選者と投稿者の間の権力関係は、抑圧としても表れていた。
これらは、必ずしも読者から新人が生まれる成長を促すものではない。しかし、『文芸時代』や『戦旗』といった、思潮の明瞭な雑誌の終刊後、また、『改造』などの懸賞でデビューした作家が増えるといった状況の中で、作家の側には、書く場を確保する役割を果たした。
投稿のジャンルは、詩、短歌、俳句、小品、感想・随筆、小説などであり、投稿文集の刊行などの盛り上がりはみられるが、上記の権力関係によって、また、文学潮流が多様で方針を決めにくいことから、作家は生み出せなかった。読者の層は、中学校卒業程度で、職業を持つものが多い。彼らは、作家を目指すというよりは、文学的趣味・傾向を同じくする仲間を誌上で探し、別に同人誌を起こすなどの活動をした。同人誌隆盛時代のハブとなるような雑誌であったと言える。
これらの読者傾向により、読者の情報交換欄である「座談室」はたいへんに拡張されている。一つには、教育の成果として、よき鑑賞者であることを示すための批評の肥大化が起こり、もう一つには、細分化された外部の創作グループについての情報共有を目指すからである。

(4)表紙絵など
表紙には、竹久夢二などの人気画家を起用し、口絵に西洋の絵画を掲げ、外国の小説や劇壇状況についての解説、また映画紹介のページを設けるなど、広い文化的領域に読者の興味を導こうとしている。これらは、文学のみならず、視覚的イメージや身体表現などが接合する特異な場を創り出している。
例えば、夢二については、一世を風靡したが、大正末には、時流に合わなくなり、不遇に甘んじていたというイメージが一般的であり、女性スキャンダルも有名である。それに対し、『若草』では、読者から〈フレッシュさ〉が称賛されるという、やや異なった評価を受けている。表紙絵では、物のアップや、図案のくり返しといった、文脈がはぎ取られたデザインが多い。昭和初期の資本主義や都市の繁栄は、人間の匿名化や、機械化・パーツ化、全く異なるものの出会いなどを、商業的美術の上にも投影していく。夢二の絵も、それまでの抒情性をそぎ落とすことで、こうした新時代のイメージと合致し、新たな評価を得ることにになった。「若草を愛する会」では、夢二は顧問になり、彼の外遊の際にも、『若草』は夢二の画信を独占し、帰国後も「旅中忘備録」を掲載している。

(5)戦中の動向について
戦中には、一般的に、検閲のもとで、国策への協力、雑誌の統合などが行われた。『若草』も例外ではないが、太宰治のいくつかの作品など、文学表現の特質を利用し、国策への協力とだけは確定できない両義的なメッセージのあるものが掲載されている。編集後記では、高らかに国策への同調を述べ、同様の傾向を持つ詩も掲載されるが、読者投稿などの傾向にも、さほど合致していないものを見ることができる。注目を浴びる先鋭的な雑誌でなかったせいで、やや自由な場が確保できているということなのか、原因についてはまだ課題があるものの、特異な位置づけができる雑誌である。
最終的には、1944 年 6 月、雑誌統廃合によって、『四季』『歴程』『蝋人形』『文藝汎論』と併せて『詩研究』となり、1946 年 1 月まで刊行された。

研究計画の段階では、以下の４点を明らかにする目標を立てていた。【Ⅰ】文壇的動向と読者の関係【Ⅱ】女性ジェンダー／男性ジェンダーの流動化の様態【Ⅲ】文学と映像メディア・身体メディアの接点【Ⅳ】〈日本〉表象とモダニズムの具体的関係、である。およそ計画にしたがって、具体的事例を明らかにしたことになる。
これまでの文芸誌研究は、特定の文学潮流を打ち出したものについてなされることが多かった。逆に、傾向の拡散、作家を輩出しないという意味では、『若草』は〈二流〉ともみなされる。しかし、今回のプロジェクトでは、この雑誌が、中心的な文学活動を側面から支える場として大いに機能していたことを、文学以外の文化との影響関係の中で明らかにした。文学研究・メディア研究、双方の意味で一定の成果は上げたと考える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　12　件）
①<u>小平麻衣子</u>「林芙美子と文芸誌『若草』――忘却された文学愛好者たち」『国語と国文学』第 94 巻第 5 号,pp81-95,2017 年 5 月,査読なし
②<u>島村輝</u>「〈転形期〉の混沌(カオス)から――小林多喜二と小樽の若き〈マルクス主義〉者たち」『昭和文学研究』第 74 集　特集「〈マルクス主義〉という経験」pp.15-28,2017 年 3 月,査読なし
③<u>島村輝</u>「若き神々の黄昏(たそがれ)――

「オリンポスの果実」とその時代」『星灯』第４号,pp.87-99,2017 年 2 月,査読なし
④島村輝「「投下する」側の「記憶」―二〇一五年・日本からの再検証」『原爆文学研究』第 15 号,pp39-49,2016 年 8 月,査読なし
⑤島村輝「プロレタリア文学研究の現況と展望――モダニズム研究を視座に入れて」『横光利一研究』(14),pp62-65,2016 年 3 月,査読なし
⑥井原あや「「妻」は誰を救ったか――映画「ヴィヨンの妻～桜桃とタンポポ～」『坂口安吾研究』第 2 号,pp.17-31,2016 年 3 月,査読あり
⑦井原あや「源氏鶏太「銀座立志伝」論」『相模国文』第 43 号,pp45-60,2016 年 3 月,査読なし
⑧小平麻衣子「林芙美子「放浪記」のカチューシャ」『語文』153 輯,pp18-24,2015 年 12 月,査読あり
⑨小平麻衣子「生き延びる『放浪記』―改造社版と新潮社版の校異を読み直す』『藝文研究』No.109-1,pp131-147,2015 年 12 月,査読なし
⑩小平麻衣子「文学の教養化と作家の効用―国文学・鑑賞主義論争にふれて」『作家／作者とは何か―テクスト・教室・サブカルチャー』和泉書院,pp97-112,2015 年 11 月,査読なし
⑪小平麻衣子「『若草』における同人誌の交通―第八巻読者投稿詩について」『語文』152 輯,pp59-69,2015 年 6 月,査読あり
⑫島村輝「リベディンスキー「一週間」と日中の文学者たち―百合子、多喜二、信三郎、戴望舒、……井上ひさし」『日本文学』63(11),pp46-56,2014 年 11 月,査読あり

〔学会発表〕（計　1　件）
①島村輝「綿貫六助の「性的指向(セクシャリティー)」と文学」2016 年 11 月 6 日,二松學舍大学（東京都・千代田区）　日本文学協会第７１回大会ラウンドテーブル発表「〈変態〉からみる近代日本精神史」

〔図書〕（計　1　件）
①小平麻衣子『夢みる教養―文系女性のための知的生き方史』河出書房新社,全 208 頁,2016 年 9 月,査読なし

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
小平 麻衣子（ODAIRA, Maiko）
慶應義塾大学・文学部・教授
研究者番号：40292635

(2)研究分担者
島村　輝（SHIMAMURA, Teru）
フェリス女学院大学・文学部・教授
研究者番号： 90216078

(3)連携研究者
吉田　司雄（YOSHIDA, Morio）
工学院大学・教育推進機構国際キャリア教育部門・教授
研究者番号：50296779

(4)研究協力者
徳永　夏子（TOKUNAGA, Natsuko）
日本大学・スポーツ科学部・講師
研究者番号:00579112

井原あや(IHARA, Aya)
大妻女子大学・非常勤講師